
ヒストリア～咎人と裁きの使徒～

並盛りライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒストリア～咎人と裁きの使徒～

【NNコード】

N9347A

【作者名】

並盛りライス

【あらすじ】

ヒストリア。最古の歴史書を巡る異世界ファンタジー。

粘着質な狂氣が腹と背筋を這いながら豹変する。

地面から、空から、そして細胞の内包する小さな憎悪からやつへくる。

男のカーキ色のジャンパーのダブルポケットには、冷たい銀の弾丸が入っている。

腰には、装甲板の薄い装飾銃が装着されている。その色は実用的な銃の色にはない種類の藍と紺を混ぜたような艶やかな色彩が施されている。

まるで模型や、何かの美術品のようなその銃は、なるほど男の細身の体や、軍隊特有の作り出した筋肉質ではない、自然に身についた筋肉によく馴染んでいた。

そして、まだ幼さの残る顔付きや、恐れをしらない子供特有の無表情も似合っていた。

まるで、銃がその持ち主に呪わせたようにも見える。

男は口に含んでいた、パンと微量の唾液の混じった唾を吐いた。

「このパンは堅すぎる。」

無表情といつよりは、感情を押し殺しているといったほうがより正しい。

「固くないパンなんて、もう何年も見てないぜ相棒。」

もう一人の男は、黒いフード付きのコートを着ており、宗教に関する

るタトゥーを額に彫つていて。

同様に右腕にもタトゥーが彫られていて、こちらの方が若干新しい。タトゥーの男は、もう一人の男とは対照的に、体も大きく、よりがつちりとした体型をしている。

黒い「T」から出でている腕も太く、力も強そうだ。

「もう少しマシなパンはある。これじゃ石と変わらない。」

溜め息と一緒に今度はパンを飲み込む。

「せめて、水くらいあればな。」

タトゥーの男も顔をしかめる。

「あと、どれくらいで辿りつける?」

「歩いて三日、走れば明日の晩ぐらいいには街に着ける。」タトゥーの男が答える。

「いつも思うんだけど、地図もないのにナズナはどうやって位置が分かるんだ?」

不思議そうに少年が聞く。

「太陽の高さ、星の位置、あとは看板かな。」

「へえ~。」

少年は気のなさそつた返事を返す。

ナズナと呼ばれた方の男の目の前には、巨大な立て看板があった。

「ジン。読めるか?」

少し意地悪そうな顔でナズナが聞く。

「馬鹿にすんなよ。これくらい読めるさ。『あと3dayで穴掘り猫の街グラ

ーベン』だろ」

得意そうにジンが言つ。

「かんな漢名語を飛ばして読むなよ。『あと3dayで穴掘り猫の街グラ
ーベン』が正しい読み方だ。」

「穴掘り猫? 穴掘りは分かるけど、猫って何だよ?」

「さあな、確かに敏捷性が高くて鋭い爪を持つた犬じゃなかつたかな
あ。」

「へえ、犬かあ。久しづりだなあ。」

ナズナは、看板の位置と太陽の位置を見て、方角を決めた。

「どうする? 走れるかジン。」

「いつまでもガキ扱いすんなよ。走るのだけは得意だ。」

「へいへい。じゃあ少し歩いたら日が暮れるまで走るか。」

ナズナは荷物を抱き直し、看板からちょうど平行になる位置に向かって歩き始めた。

#2 迷彩鼠と腹の事情

月はやがて太陽に成り代わり、闇を照らす支配者となる。その術を知るものだけが夜を支配するのだ。

ジンとナズナは、穴掘り猫の街グーラーベンを目指して北上していた。夜になると土が湿り、少し足場も悪くなる。走っていた二人も、やがて歩くことにした。

「はあはあ、だいぶん冷えてきたなあ。」

ナズナが言つよつて、「夜の森は昼の間、光合成のために熱を発散するのとは逆に、夜は一酸化炭素を放出するだけだ。

「足が棒になりそうだよ。今日はもう休もうよ。」

「そうだな、夜の森は方向を見失いやすい。それに妖精の迷路にでも迷いこんだら厄介だ。」

言つなり、ナズナは木々の間から見える星を頼りに位置を計つた。

「少し西にずれてる。でもまあ、予想範囲内だひつ。」

「じゃあ休もうよ。」

ジンは早く休みたいのか、その場に座り込む。

「よし、ソリで休憩だ。見張りはこいつのよつに交代でやる。」

「うそ、分かってるよ。二時間毎だよね。おやすみ。」

ジンは言つて、木の根を枕にして横になる。

「お前が先に寝るつて決まつた訳じゃ……まあいいか。」

ナズナは荷物の中から、毛布を取り出して自分の体を覆つた。森は危険が多いよつに見えるが、身を隠すためには都合が良いのである。

逆に、荒野や砂漠など見通しの良い所では盜賊などに見付かってしまう恐れがある。

ただし、常に森の中で生活し領域としている獸にとっては、侵入者を敵と見なし危害を加える可能性は、ないとほいえない。

背の高い広葉樹を揺らしながら、陰が一人の寝所に近付いてくる。

その数は一匹ではなく、同種の群れが取り囲むよつに集まつてくる。

「ジン、悪いな。五分しか経つてないが起きろ……。」

低く、鋭くナズナが叫ぶ。

ジンは疲れを見せず、すぐに田を覚まして警戒体勢に入った。

右手は装飾銃に伸ばし、左手は地面に着いたままだ。

「第一兵装解放！！」

ナズナが吠えると、右腕のタトゥーが光り、鉄のナックルのような武器になる。

ジンは身動きを取らずにそのままの体勢を保つ。

茂みが揺れて、ナズナの半分もある太った大鼠が飛び出した。

鋭い牙は獰猛だが、その大きさ故に非常に動きが遅い。しかし、その毛皮は葉っぱや草の色と酷似していて、見ている人間を惑わす。

通称

「迷彩鼠」

。

ナズナは間髪入れずに、鼠の頭骨を殴つて碎く。

緩慢な動きでも、集団になると全て避けるのは難しい。

できるだけ、攻めるのではなく、襲ってきた相手だけを狙い打ちにする。

ジンは、サポートに回りナズナのカバーできない鼠を撃つ。

しかし、遠田で暗く、見分けがつきにくい迷彩鼠にはなかなか当たらない。

当たったとしても、腕や足などで致命的なダメージを『えられない。

「くそお、見えにくいよ。これじゃ弾が勿体ない。」

ジンは苦戦していたが、ナズナにとつては余裕だった。あつという間に鼠の死体の山ができた。

残りの鼠も、戦意を喪失したのか去つていった。

「「めん。全然役に立てなかつた…。」

ジンは落ち込むというよりも、心の底から悔しいという顔をしていた。

「状況によつては、戦いにくい敵もいる。夜だしな。」

ナズナは気にしていない。
力を認めてほしいジンは、それが気に入らない。

「でもオカシイな。普通迷彩鼠つてのは臆病で、他の生き物が領域に侵入してもできるだけ隠れて通りすぎるとのを待つもんなんだが…。」

「

「あつ…。」

ジンが何かを見つけた。

「どうしたジン…？」

「もしかして、卵？」

そういうと、わざと枕にしていた木を指さす。

「なるほど…卵か、それなら納得できる。さつきのは全部の迷彩鼠だったんだ。卵を守るために攻撃的になつていたんだな。」

ナズナは一人で大きく頷いた。

「でも、なんか俺らが悪い事したみたいで、後味悪いなあ。」

ジンは少しだけ悔やんだ。

「いや、でも得したかもな。迷彩鼠の卵は栄養価も高くて毒もない。ヘルシーだし味も良いらしい。」

ナズナは木に登つて、卵を集め出した。

「おい、ナズナ。それはマズいんじゃねえの……。」

「不味くないって、美味いらしいぜ。」

ナズナは上機嫌だ。

木から降りたナズナを、ジンは少し呆れて見ていた。

「どうした？ 固いパンは嫌だつていつたのは誰だよ？ 食べれる時に食べれる物があるんだ。食べなきや損だろ。」

「俺、いらない。固いパンでいいや。」

ジンは小さく言った。

「いらないのか？ じゃあ俺は田玉焼きにして食べよつと。」

ナズナは、ジンの事を気にしているそぶりを見せず、鍋と火打石を荷物から取り出した。

結局、ジンは仕方なく固いパンを食べて、ナズナは目玉焼きを二個も平らげた。

卵は持てるだけ、割れないように野草と大きい葉っぱで包んで荷物に忍ばせて、二人は街に向かつて歩き出した。

#3 本当の善の話1

賢い人は言いました。本当の悪は善の中にあり、本当の善は限りなく悪に近いと。

森を抜けると谷があり、底には大河があつた。

崖には、無数の坑があつてその中に街があるので。

元々は鉱山の街で大きく発展していたが、運搬の問題や鉱石の質の悪さから次々に閉鎖されて、中核にあつた街が坑を拡張していき今のような形になっている。

主な生産品は、原石と鉄くずだが、外との交流があるために発達していた。

「暗くなる前に着いてよかつた」

ナズナが言つ。

「今日は、久々に布団で寝れるな

ジンも感慨深く言つ。

入り口の縦坑の前に詰め所がある。

「旅の人ですか？」

初老の男性が一人に声をかけた。

「まあ、そうですね。」

ナズナは微妙な返し方をする。

「貴殿方は本当に運が良い。先日まで、この街は盜賊が滞在していましたよ。」

「盗賊!?」

「ええ、バルカス一味が三日ほどいました。何でも、この先にある遺跡にスゴいお宝があるそうで…まあ気性が荒い奴らですが、宿代や酒代を落としていってくれるのでいいんですけど。」

「バルカスか、聞いたことない名だな。」

「知らないなあ。」

ジンも呟つ。

「何にしても、関わりあいにならない方がいいな。」

「おじさん。遺跡って何?」

「おいおいジン。」

「ああ、キンダリー遺跡か。軍の調査は終わっているし、めぼしい

物は皆持つていかれたと聞くし、街の者も殆んど寄り付かないんじやよ。」

「お主があつたら盗賊達が来てくれる。盗賊が来るから助かるつて訳か

ナズナが言つ。

「いやいや、嘘じやねえよ。盗賊どもが勝手に出て出しただけや。」

「ジン、お主はないつてよ。」

「なんだ……嘘かよ」

「おこおこ、お前ひ……」

「大丈夫ですよ、誰にも話しませんから。あなた達のビジネスの邪魔はしません。」

「やうじてくれると助かるな……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9347a/>

ヒストリア～咎人と裁きの使徒～

2010年10月21日21時12分発行